

現実改變能力という特別な力を使いこなす自信がないのも、十悟を巻き込んでしまったという事実も変わることはない。

ただ、自分と、自分の願いから生まれた〈エクステンド〉にも出来ることがあるのなら――

――それと全力で向き合いたいというのが夕星の出した結論であった。

「よしっ！」

鏡の前で普段は緩めつばなしのネクタイを締めなおし、「A R A s」の文字が刻まれたピンを止めながらに自覚した。

今の自分は「非日常」の側に立つエゴシーター神室夕星であると。



A R A sの基地内は広大だ。地下空間にアリの巢上に広がる施設は、作業員たちの居住スペースから売店に、果ては娯楽用のダンスホールまで揃っていて、全部を見て回るだけでも一苦勞である。

「……というか、完全に迷ったな」

支給品の確認を終えたならブリーフィング室に来るよう未那月に言われていたのだが、前にも後ろにもあるのは一本の通路だけ。

「こんなことなら、事前に基地の見取り図でも貰っておくべきだったな」

そんなことを呟きながら通路を進めば、嚴重な鉄扉に突き当たった。「エンジニアスタッフ以外危険立ち入り禁止」と張り紙をされた扉は、ここが目的地ではないことを暗に教えてくれている。だが、虎穴に入らずばなんとやらだ。仮に叱られることになっても、スタッフに道を教えてもらおう。

「ええい！ ビビったら負けなんだよ！」

思い鉄扉を押し開けて、夕星はその先へ飛び込んだ。

どうやらここは整備区画のようで。機材の行き交う騒音と、機械油の匂いが感覚を刺す。そして、夕星の眼前にはハンガーへ固定される〈エクステンド〉の巨体があった。

整備のために各部の装甲を取り外され、内部骨格だけになった姿からは寒々しい印象を受けてしまう。さらに壊れた右腕部をエゴシーター能力で無理やり補強し動かしたのが

不味かったのだろう。〈エクステンド〉の右肩から先は取り外され、オーバーホールが始まる直前であった。

「まじか……」

巨大ロボットの整備に立ち会える機会なんて滅多にない。以前までの夕星ならば目をキラキラと輝かせていただろう。

ただ、今の夕星は少し違う。

「よし……少し、試してみるか」

〈エクステンド〉の破損は全て、機体に搭乗していた自分の力不足が原因だ。ならば「元通りに直れ」と願いを込めてみた。

けれど、その願いが破損した右腕に届くこともなければ、〈エクステンド〉が反応する様子もない。周辺の何かが砂塵に変わる気配もないままに、翡翠色のカメラアイは沈黙を貫き通す。

「やっぱりダメみたいだな……けど、それなら」

今度はポケットに手をつ突っ込んで、ハンカチの包みを取り出した。そして、両端を掴みながら「甘いものが食べたい」と願いを込める。

「これならどうだ」

ハンカチは端からサラサラとした砂塵に分解され、小さな球体を創り始めた。透き通るような色をしたそれは一粒のキャンディーだ。

この程度の能力行使であれば現実^{メルマー}固定値の変動もごく僅かで、特に世界云々がという問題にもならないらしい。床に落ちる直前でキャンディーをキャッチした夕星はそれを口の中に放り込んだ。

「うげっ……俺、イチゴ嫌いなんだけどな……」

口に広がるのは苺の甘ったるさだ。やはり、現実に干渉するのも一朝一夕にはいかならない。

未那月からはA R A sに加入するにあたって様々な物品を支給された。小型通信機&GPS付き多機能ネクタイピンに、歯車状に変化した瞳を隠すための特殊コンタクト。そして何より重要だったのが、エゴシーター能力にまつわる調査資料だ。

資料には「フェイズIIIに覚醒したエゴシーターは、メルマー値に干渉することで願いを叶えることができる。けれども、願いが叶うのはあくまでも『結果』であって、その結果に至るまでの『過程』は各エゴシーターによって異なる」という旨の記載があった。

つまりだ。夕星の能力であれば、「物質Aを一度砂塵へと分解し、物質Bに再構築する」という『過程』を経て、願いが叶うという『結果』へ辿り着くのである。

ただ、そこにも幾つかの制約もあるようだ。

「質量の小さいものから大きいものを作ったり、逆に質量の小さいものから大きいものを作るのは無理なんだよな」

例えば、さっきのハンカチを握ったまま「へエクステンド」がもう「機欲しい」と願ったとしても、へエクステンド」に創られるわけじゃない。

二五メートルを超える巨体を形作るには、それこそ基地の一面をまるごと砂に変える過程が不可欠なのだ。

さらに厄介なことに、この能力では同じ物質を複数回に亘って分解の対象にすることもできないらしい。

「えっと……俺は一度、『陽真里を守る力が欲しい』と願って、壊れたへエクステンド」を、動く状態のへエクステンド」に作り直したんだから」

だから、さっきみたく「直れ」と願ったとしても、現実が歪むこともないのだ。

他にもへエクステンド」を起点として、半径一〇メートル以内でなくては能力が発動できなかったり、能力の酷使には体力を消耗したりと、課せられたルールはかなり多いように思えた。

けれど、現実を歪める能力としては妥当なデメリットの範疇。寧ろ緩すぎる制約に思える。

「つまりは俺の工夫と、願い方次第なんだよな」

そこまで考えて、夕星はひとまず覚醒したエゴシエーターの力を前向きに捉えることにした。

それに驚くべきは、自分がベットで意識を失っている短期間でここまで能力を分析し、資料にまとめてくれたARAMSの医療スタッフ達だ。正式名称の「対現実改変機構」は伊達ではないらしい。

そんな夕星の鼓膜に、よく聞き慣れた声が響く。

『ふうん……私を待たせた挙句、立ち入り禁止区画で油を売っているだなんて、呆れてものも言えないわね』

それは紛れもない、怒っているときの藤森陽真里ふじもりのものであった。

「ひ、ヒバチ!? な、なんでお前がこんな所に!?!」

背筋をなぞるような悪寒に慌てて振り返る夕星であったが、そこに生真面目な幼馴染の姿はない。

代わりにあったのはこちらに向けられた拡声器と、腰から大太刀を吊り下げる未那月のニヤケ面だ。

「ふふん。見事に騙されてくれたね♪」

「なっ……!?!」

ずっと待たされていた彼女はついに痺れを切らして、夕星を迎いに来たのだろう。

この悪戯を思いついたのも突発的なのだろうが、それが妙にツボに入ったらしい。

『やーん、夕星のえっちー』『私ね、ずっと夕星のことがー』と、ブリーフィング室までの道順を案内される最中も彼女はずっと陽真理の声マネで弄ってくるのだった。



ブリーフィング室はとにかく書類に溢れかえっていた。最奥のデスクには紙の山が聳え立ち、壁一面を埋め尽くすように様々な調査資料がピンで留められている。

初めはファイリングして管理していたのだろうが、それが収まり切らずに溢れ返ってしまっただけという印象だ。

「なんすか……この足の踏み場もない部屋は……」

「いやあ、日頃から片付けようと思ってるんだけどね。私も何分、潜入期間が長くなって、こっちの部屋はほったらかしになっていたんだよ」

「それにしたって酷すぎるでしょ。ていうか、今どき書面ってのもおかしくないですか？ デジタル化して管理すれば」

「あっ、一応ここにある全ての資料はデジタル化してるし、基地内のデータベースからいつでもアクセス出来ようになってるよ」

「ならどうして、書面の方を残してるんです？」

「エゴシエーターの影響によってデジタル化された情報が全て改竄される恐れがあるから、こうやってアナログのバックアップを残しているんだよ。逆も然りだからデジタル化した情報も削除できないし、全く困ったものだね」

「ん……ちょっと待ってください。それじゃあ、デジタルとアナログの両方に作用する現実 変更能力があった場合はどうするんです？」

「その場合は私たちの詰みだね」

未那月はいとも容易く、答えてみせる。

「考えてみたまえ、神室くん。私たちが立ち向かうのは歪んでゆく世界だ。日常が非日常に変わるのは一瞬だし、そもそも現実が歪んでしまったことに気付けない可能性だってある」

彼女の眼差しが、鋭利に細められてゆく。それは普段戯けてばかりの彼女が初めて見せた、真剣な表情かもしれない。

「だからね、私たちは常に先制しなきゃいけないんだよ。先手、先手を取り続けて、歪んでいく世界に立ち向かう必要があるんだ」

ピンと張り詰めたのは緊張感だ。一瞬の遅れが命取りになるのは、喧嘩ごとやゲームによく似ている。けれど遅れてしまった代償は、比べ物にならなかった。

「まっ、シリアスな雰囲気もここまでにして。そろそろ本題に入ろうじゃないか」
パン！ と手を打って、彼女は話を切り出す。

「神室くんが A R A s の一員になってくれたことは喜ばしいことだし、本当はエゴシエーターに纏わるアレコレにもゆっくり慣れてほしいと思っているんだ。ただ、生憎と今の A R A s は、とある理由で一番のやりて 作業者が抜けちゃってね。正直、ネコの手も借りたい始末さ」

要は夕星にも、さっそく働いて貰いたいということだろう。

彼女が先言したようにA R A sが常に先手を取り続けなければならないというのなら、いきなり働かされること自体に異論はない。寧ろ、役に立てるのが嬉しいくらいだ。

ただ、組織に入ったばかりの自分にこなせる任務があるのだろうか？

荒事ならいざ知らず、潜入や工作といった活動は上手くやれる気がしない。

「そう身構えなくても大丈夫さ。これは君向きの調査任務……というか、神室くんしか適任者のいない任務だからね」

未那月は部屋中に散らばった書面の中から、なんの迷いもなく一枚の資料を拾い上げる。

「君の初任務は、この少女を徹底的に調べ上げることだ」

書面にプリントされたのは、模範通りに天川高校あまのがわの制服を着こなした女子生徒の写真だ。

だが、夕星は、ボブカットの髪型と丸っこい猫目をした彼女のことを既に誰よりも熟知している。

——そこに写る少女の写真は紛れもなく藤森陽真里だったのだから。

「……ヒバチですか」

思いのほか、夕星の驚きは小さかった。

エゴシエーター因子を獲得する条件は、「スターレター・プロジェクト」に参加すること。であれば、夕星と同じ小学校に通い、メッセージカードに願い事を綴った幼馴染がエゴシエーターに覚醒していたとしても、おかしくはない。

「やっぱりヒバチもエゴシエーターなんでしょうか？」

彼女の話が出てくることも想定の範疇だった。

「フェイズⅢに覚醒したエゴシエーターであれば瞳孔に変化が現れるだけでなく、現実改変能力を使用すると特別な信号を発するんだ。そこで潜入中の私は、信号の受信機を天川高校に仕込んでおいたのだが……残念なことに反応をキャッチできずに終わったよ」

「けど、逆に言えばヒバチも俺みたく能力を自覚していないフェイズⅡのエゴシエーターかもしれないってことですよ」

「ふふっ、飲み込みが早くて助かるよ」

エゴシエーター因子を宿したからといって、必ずしも誰もがフェイズⅡ以降の能力に目覚めるわけじゃない。

未那月たちA R A sは「スターレター・プロジェクト」の参加者リストを保有する。そしてリストを調査した結果、エゴシエーターに覚醒する前に、プロジェクトの参加者が死亡した例が幾つか確認されたのだ。

「宿したエゴシエーター因子が発現し、フェイズⅡに移行するタイミングには個人差がある。それに我々の調査には、因子を宿したまま病死や事故死したエゴシエーターの例も少なくはない。『死に瀕した瞬間に、眠っていた力が』ってのは少年漫画の鉄則だが、世の中

はそう上手く出来てないみたいだね」

「もつとも、A R A s が参加者リストを手に入れたのも数年前と比較的、最近のことだ。

エゴシエーター能力によってリストの内容を改竄されている可能性もあるために、どこまで信用できるかは曖昧らしい。」

「じゃあ、一つ質問してもいいですか？」

夕星の頭に浮いたのはちよつとした疑問だ。

「先生は、半年度から俺たちの学校に潜伏してたんですよ？ 名簿リストがあるって言うなら、俺やヒマリがエゴシエーターでかもしれないって当たりも付いてたんですし。なにどうしてもつと踏み込んだ調査をしなかったんでしようか？」

「ちよつと基地内を回っただけでも、A R A s の保有する技術水準が極めて高いことは理解できた。やろうと思えばもつと様々な調査ができたはずである。」

「良い質問だね。けど、答えは単純。リスクヘッジをした結果さ」

「未那月は腕を組ながらに応える。」

A R A s からすれば、危険な思想を持つエゴシエーターは等しく脅威だ。フェイズIIといえど、下手に能力があると自覚させ、敵対した場合の対処は極めて困難となる。

「さつきも言ったけど、今のA R A s はごっそり人材が抜けたから戦力も極端に低下してるんだ。それに相手が危険なエゴシエーターなら、願うだけで私たちという存在自体をこの世界から抹消することも容易だろう」

「だから、長期に渡り遠巻きに観察する必要があったのだ。」

「ん……だけど、おかしくないですか？ リスクヘッジって言うわりに、先生は俺にだけ組織の秘密をベラベラ喋ってる。自分で言うのもアレですけど、俺は中学の頃、かなり荒れた不良なんですよ。敵対する可能性を考慮するっていうのならバカ真面目なヒバチじゃなくて、元ヤンの俺の方じゃ？」

「フィクションの中みたく、全てのヤンキー少年が捨て犬を拾うような善人とは限らない。夕星が反社会的、或いは破壊的な思想を秘めていたとしても何らおかしくはないのだ。」

「だと言うのに、彼女は絵に描いたような優等生である陽真里をより危険視しているような気がしてならなかった。」

「私が神室くんに信頼を置いているのは、君が〈エクステンド〉を創り出したエゴシエーターだからだよ。君の願いから生まれたマシーンが善良な存在である限りは、君の根っこが善良なままだっという何よりの証明だからね」

「なら、ヒバチにだって信頼しても問題はないでしょう。アイツは俺以上の善人なんですし、そもそも俺が更生できたのだって、アイツのお節介があったからで」

「本音を言ってしまうなら、彼女のことを疑われるのは不愉快であった。夕星の態度は少し刺々しいものへと変わってしまう。」

「ヒバチは俺の恩人なんです。断言したっていい、アイツがフェイズIIIのエゴシエーターに覚醒したとしても、その力を悪用するわけがないって」

「なるほど。……だったら、私も自分の本音を表明しておこうかな」

未那月が再度、両腕を組み直した。

一才のおふぎけを抜きにして、彼女もその言葉をハッキリと口にする。

「私ね、藤森陽真里こそが、この世界に『怪獣』を生み出したエゴシエーターであると疑っているんだ」